

# 山田西地区遺跡分布調査概要報告書

1990年11月

駒ヶ根市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、駒ヶ根市東伊那山田地区に所在する「ふるさとの丘」予定地における遺跡分布確認調査の概要報告書である。調査の名称は調査対象地区が山田遺跡の西側に当ることから「山田西地区遺跡分布調査」とした。
2. 調査は市補助金により駒ヶ根市教育委員会が中心となり駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会を組織して行った。
3. 調査区は考古館予定地に第Ⅰ調査区を、ふれあい学習広場予定地に第Ⅱ調査区を設定した。
4. 分布調査の中でグリッド設定時の測量は友野良一・北澤武志が、グリッドの層位断面実測は北沢雄喜が行い、その他の実測・写真撮影は北澤(武)が行った。
5. 遺物の整理、本報告書の作成は北澤(武)が行い、友野良一が監修した。
6. 調査に伴う遺物、実測図等の関係資料は駒ヶ根市立博物館に保管してある。
7. 出土石器は全点を図示してあるが、土器は特徴のあるもののみにとどめてある。

# 目 次

## 例 言 目 次

第Ⅰ章 分布調査の経緯	1
第1節 分布調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1
第3節 分布調査の経過	2
第Ⅱ章 遺跡の環境	3
第1節 位置及び地形・地質	3
第2節 歴史的環境	3
第Ⅲ章 分布調査概要	8
第1節 調査概要	8
第2節 グリッド内の層位	8
第3節 出土遺物	9
第Ⅳ章 総括	10

## 図版目次

第1図 調査区の位置	5
第2図 調査区の位置と周辺の地形	6
第3図 周辺の遺跡分布図	7
第4図 第Ⅰ調査区グリッド設定図および遺物の分布状況	11
第5図 第Ⅱ調査区グリッド設定図および遺物の分布状況	12
第6図 グリッド断面土層図1	13
第7図 グリッド断面土層図2	14
第8図 グリッド断面土層図3	15
第9図 グリッド断面土層図4	16
第10図 グリッド出土土器実測図	17
第11図 グリッド出土石器実測図1	18
第12図 グリッド出土石器実測図2	19
第13図 グリッド出土石器実測図3	20
分布調査グリッド一覧表	21

## 写真目次

写真1	調査区遠景
写真2	調査区調査前状況
写真2~12	グリッド断面の状況
写真13	オ2グリッド流路、磨製石器出土状況、第Ⅱ調査区調査風景
写真14	グリッド出土土器
写真15~17	グリッド出土石器

# 第Ⅰ章 分布調査の経緯

## 第1節 分布調査に至るまでの経過

駒ヶ根市アルプスコミュニケーションシティ構想の一環として、「ふるさとの丘」を東伊那郡伊那耕地山田地区に建設することが決まり、平成2年度事業として予定地の内、仮称「考古館」、「ふれあい学習広場」の造成工事が行われることになった。

工事予定地は、遺跡分布図の遺跡地であったが、平成2年9月5日に県教育委員会文化課と現地にて協議をし、遺跡分布の確認のための調査を行うことになった。

調査は駒ヶ根市が事業主体となり、平成2年10月5日付で駒ヶ根市発掘調査会との間に委託契約を締結、調査団を編成し、団長には友野良一氏をお願いして同年10月7日より11月7日まで現地での調査を行った。

## 第2節 調査会の組織(駒ヶ根市発掘調査会)

顧問	小平 善信	(駒ヶ根市文化財保存会会长)
中村 敬及	(駒ヶ根市教育委員長)	
会長	高坂 保	(駒ヶ根市教育長)
理事	友野 良一	(駒ヶ根市文化財審議委員会会长)
松村 義也	( " )	副会長)
竹村 達	( " )	委員)
林 越	( " )	委員)
吉江 修深	( " )	委員)
荒井 徳博	( " )	委員)
福沢 亘	(教育次長)	
下村 幸雄	(博物館長)	
監事	宮脇 昌三	(駒ヶ根市郷土研究会会长)
下平 基雄	(駒ヶ根市収入役)	
幹事	気賀沢 喜則	(駒ヶ根市教育委員会社会教育係長)
流沢 修身	( " )	社会教育係)
北澤 武志	(駒ヶ根市立博物館)	
白沢 由美	( " )	

### 1. 山田西地区遺跡分布図

(事務所 駒ヶ根市上穂栄町23番1号 駒ヶ根市立博物館内)

団長	友野 良一	(日本考古学协会会员)
調査主任	北澤 武志	(駒ヶ根市立博物館)
調査員	北沢 雄喜	(上伊那考古学会会員)
"	小町谷 元	( " )
作業員	市村国忠、林吉十、渋谷鉄雄、小林満寿子、細田律恵、竹村章子	
協力者	木下平八郎、小田切守正	

〈敬称略 順不同〉

### 第3節 分布調査の経過

- 10月 7日(日) 雨の中、I区測量を行う。1、3、5、A、C、E、G列の主杭設定。
- 10月 8日(月) グリッド杭打ち(1~5、A~G列内)
- 10月 9日(火) 7、I列の主杭設定。残りグリッドの設定。
- 10月11日(木) I区グリッド内表土の除土及び抜根が宮田村の小田切氏の指導によって行われる。II区グリッドの設定。
- 10月14日(日) 機材運搬。テント設営場所の下草刈り。
- 10月15日(月) 午前中雨のため午後よりテント設営。I区A1、A3、A5グリッドの掘り下げを開始する。石や木の根のため作業は困難である。
- 10月16日(火) A1~5、B2~6、C1グリッド掘り下げ。C1北壁に沿って硬い土があり、1グリッド分北へ拡張しC'1グリッドとする。II区表土の除土、層位確認のためG3グリッドの西にトレーナーを掘るが地表より180cm位の砂礫層より湧水。
- 10月17日(水) I区にベンチマークB.M.-①、B.M.-②を設定。C'1、C3~5、D2~6、E1グリッドの掘り下げ。地元の伊藤氏より聞き取り調査。
- 10月18日(木) D4、E1~5、F2~F6、G5、H6グリッド掘り下げ。A1平面実測。
- 10月19日(金) F2、G1~3、H2~4、I1~3グリッド掘り下げ。H4グリッドより弥生時代の磨製石器が出土。B列北壁、B4、D4、F4の東壁の断面実測を行う。C'1平面実測。
- 10月20日(土) I5グリッド掘り下げ。本日までにI区のグリッド掘り下げを完了する。D2北壁実測。A1~C5までグリッド内清掃。
- 10月22日(月) I区6列の断面実測。II区3列、4列グリッドの掘り下げ。
- 10月23日(火) I区1列グリッド断面実測。II区1列、2列グリッド掘り下げ。オ2グリッドの落ち込みは溝状となる。
- 10月24日(水) I区北よりグリッド内清掃。I区A列、B列グリッドの写真撮影。II区2列、3列及びイ列、オ列の北壁断面実測。本日までに全グリッドの掘り下げ、断面実測を完了したため作業員は本日までとし、テントを疊む。
- 10月27日(土) 必要な物を残し器材を整理する。
- 10月29日(月) I区C1~I3グリッドの写真撮影。
- 10月31日(水) II区A2~キ2グリッド写真撮影。I区I1、H4掘り直し。
- 11月 1日(木) II区カ3、キ4グリッド写真撮影。C'1平面実測。調査区内全体レベル測定(I区1列、4列)
- 11月 2日(金) I区II区全体レベル測定。遺物レベル測定。
- 11月 3日(土) 遺物位置平面実測。遺物取り上げ、A1~C3まで。
- 11月 4日(日) 遺物取り上げI区C3~II区キ4まで。
- 11月 7日(水) D2、オ2実測
- 11月 8日(木) II区、地形測量時の杭F1、F2、G1、G2を平板実測で測定。本日で現場での調査を終了する。

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 位置及び地形・地質

(第1図、写真1-1、2、3、第2図)

本調査区は駒ヶ根市東伊那の山田地区に所在する。JR飯田線太田切駅より東へ約4kmに位置し、標高は第I調査区で668~672m、第II調査区で677~680m、天竜川との比高は108~120mである。地形的には伊那山脈から流れ出て天竜川にそぐ河川が天竜川左岸の河岸段丘上に形成する扇状地上に位置する。

両調査区の南には唐沢川、北に北川が流れ、西には井筋である「上井」の細い水路がある。

唐沢川から北は一旦緩やかな昇り傾斜となっており、第I調査区の南側で土手となって下っている。この土手は人工のもので、以前に白土(Pm-1)の採掘があり、採掘後に整地を行い土手をつくったとのことで、採掘前にはなだらかな下り傾斜であった。第I調査区は谷筋にあたり、昭和26年の山田遺跡発掘調査の頃には湿地帯となっていたという。谷筋を下った所には溜池の「下堤」があり、すぐ南には富士塚がある。土地の人の話では、この谷筋を「こうろじくぼ」と呼んでいたとのことであるが定かではない。

第I調査区と第II調査区との間に丘陵が西へ向かって伸びており、「上井」の付近で鋸頭を見ることができる。鋸頭ではPm-1が下部にかなりの厚さで堆積していた。また「上井」は現在コンクリートの水路となっているが、その工事の時に青い粘土が出たとの話もあった。

第II調査区は緩やかに北へ向かって下る斜面となっており、浅い窪地の南の斜面である。

また第I調査区より東へ約100mの位置に、昭和26年に行われた山田遺跡発掘調査のトレンチや、住居跡の跡が窪みとなって残っている。

調査前の土地利用は、第I調査区は栗と杜仲の林で、それ以前は畑作を行っていた時期もある。第II調査区は牧草地として利用されてた。両調査区の間の丘陵から西側にかけては桑畠となっており、また調査区東側の林の中には以前に畠として開墾された平地を隨所に見ることができる。

### 第2節 歴史的自然環境 (第3図)

東伊那地区の河岸段丘上は、小河川が開拓した丘陵状地形が発達するとともに各時代の遺跡が数多くあり、大正末年発行の「先史及び原始時代の上伊那」にも多くの遺跡が確認されている。

縄文時代の遺跡は、大久保(1)、反目(4)、反目南(6)、殿村(10)、山田(13)、青木北(2)などが知られる。

弥生時代になると遺跡の数は増え、遊光(5)、反目南(6)、殿村(10)、狐くぼ(11)、丸山(12)、城村城(15)、善込(16)、栗林神社東(17)などがある。

古墳時代から平安時代にかけての遺跡は、反目(4)、遊光(5)、反目南(6)、殿村(10)、上塙田(18)などがある。また丸山に古墳があったとの言い伝えもあるが定かではない。

また天竜川左岸はその立地条件を生かした中世城館跡が多いことで知られ、大久保城(2)、高田城(3)、幡村城(8)、遊光城(7)、幡村古城(9)、城村古城(14)、城村城(13)、塩田城(19)、青木城(20)、原城(23)、菅沼古城(24)があり、遊光遺跡では陸屋根式の住居址が発掘されている。

本調査区の西方にある山田遺跡については、以前に伊那村遺跡の一遺跡として発掘調査が

行われているので概略について触れてみたい。

天竜川によって形成された河岸段丘の第2段丘上には農村遺跡があり、第3段丘上には裏くぼ遺跡が、さらに東に広がった丘陵地には丸山遺跡があり、山麓近くに山田遺跡がある。

以上の4遺跡は駒ヶ根市に合併する前の伊那村が昭和25年～26年にかけて発掘調査を行っており、総称して「伊那村遺跡」と呼称されていた。

昭和23～24年にかけては一帯の表面採集が行われ、昭和25年に宮坂英式氏に指導を受け友野良一氏等により山田遺跡第1号住居址の発掘が行われた。さらに昭和26年には大場善雄氏を調査委員長として伊那村遺跡の第一次調査が実施され、山田遺跡では住居址6軒、小窓穴址4基が発掘されたと報告がなされている。出土土器を概観すると他の時代のものも混ざっているが、縄文時代中期後葉の土器がほとんどを占めこの時期の住居址と思われる。

第1号住居址と第3号住居址は復元が実施され、遺跡のある一帯が上の原と呼ばれていることから地域の人々に「上の原遺跡」と呼ばれて長年親しまれてきたが、破損のため昭和40年に取り壊され現在に至る。この度ふるさとの丘を建設するに当たりこの住居址2軒の復元を行う予定がある。

#### 【参考文献】

\*友野良一他

「長野県上伊那郡伊那村遺跡－第一次調査概報－」

『信濃』第三巻第六号 1951年

\*藤島玄治郎・友野良一

「長野県上伊那郡伊那村遺跡復元住宅の考察」

『信濃』第三巻第十一号 1951年

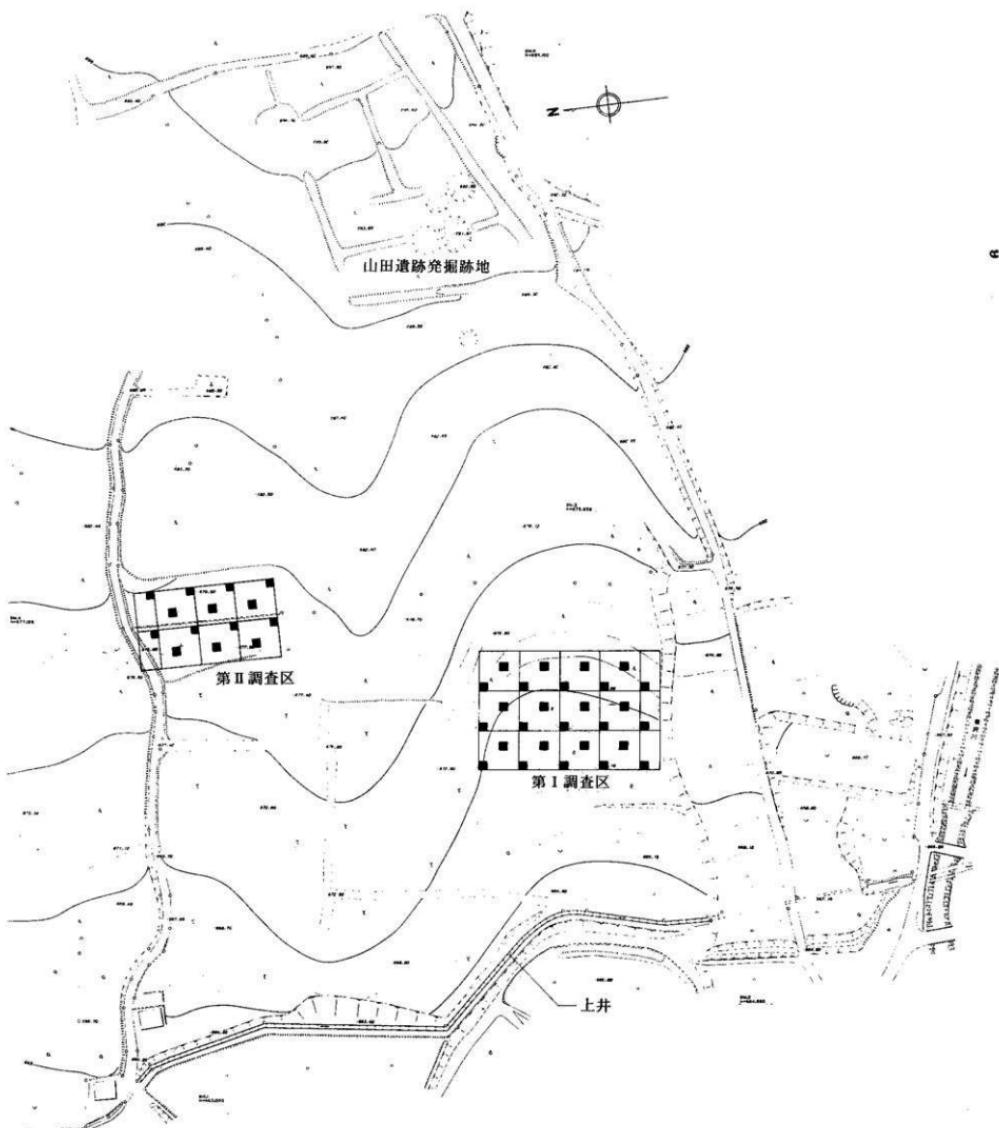
\*友野良一他

「長野県上伊那郡伊那村遺跡第二次調査概報」

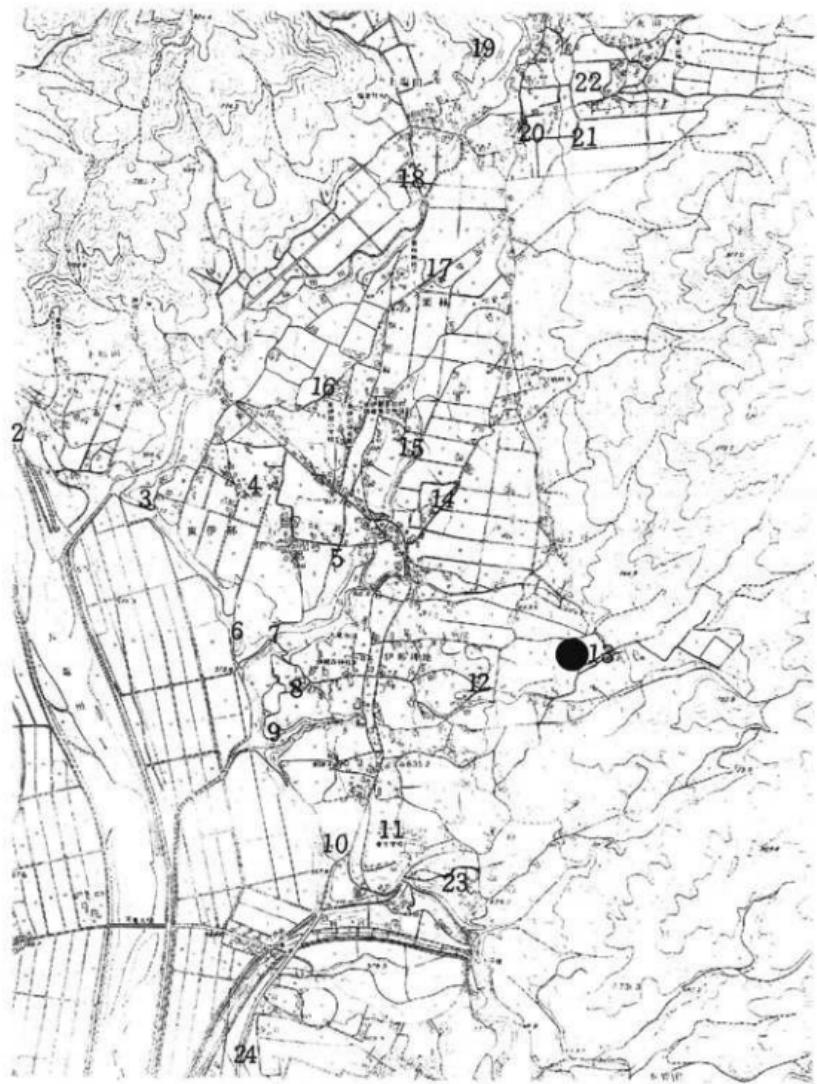
『信濃』第四巻第十一号 1952年



第1図 調査区の位置(S=1:100,000)



第2図 調査区の位置と周辺の地形(S=1:1,000)



- 1 大久保 2 大久保城 3 高田城 4 反日 5 遊光 6 反目南 7 遊光城  
 8 稲村城 9 稲村古城 10 殿村 11 狐くぼ 12 丸山 13 山田 14 城村古城  
 15 城村城 16 善込 17 栗林神社東 18 上塙田 19 塩田城 20 青木城 21 青木  
 22 青木北 23 原城 24 菅沼古城

第3図 周辺の遺跡分布図(S=1:20,000)

### 第Ⅲ章 分布調査概要

#### 第1節 調査区概要 (第2、4、5図)

調査区は「ふるさとの丘」の「ふれあい学習広場」予定地は斜面の上部の土を削り、下部に盛土をし造成するとの予定であるため予定地東半に第I調査区を設定した。また「考古館」予定地には第II調査区を設定した。その他の部分については切土が浅いとのことで調査は行わないこととなった。

「ふるさとの丘」の事前調査で地形測量がなされており、第I調査区では地形測量時E6杭=分布調査使用杭C3を基準として、地形測量時のメッシュに沿った設定を行った。

第II調査区では頑の石垣を過ぎて任意の方位に設定し、後に地形測量時の杭を測量し位置の特定を行った。

また、標高は第II調査区では地形測量時のBM4=677.126mを基準として使用し、第I調査区ではBM4から測量を行いB.M.-①=665.200とB.M.-②=663.800を設定し使用した。

グリッドは2×2mのものを100m中に2グリッドを設定し黄褐色テフラまで掘り下げた。

グリッド名は第I調査区では南北方向に南からA~I、東西方向に西から1~6とし、第II調査区では南北方向に南からア~キ、東西方向に西から1~4とした。

写真による記録は、平面、東壁、北壁の撮影を全グリッド行い、グリッドの断面は時間的制約から列を決め実測を行った。遺物は1/10で位置の測定をしレベルの測定を行った後、まとまって出土したものは一括して連番で取り上げた。

なおC1グリッドを調査中、北壁ぞいに堅い土が現れ、北側にグリッドを拡張しC'1グリッドとした。堅い部分は東西に30cm幅の帯状となり新しい時期の歴と思われた。

#### 第2節 グリッド内の層位

(第6、7、8、9図、写真2-3~13-1)

第I調査区では谷筋のため流れ込みの土石があり地層は複雑になっており、また畠地であったり、樹木が植えてあつたりしたので擾乱もかなり受けている。

以下各層位の在り方について概略を述べると、まずI層の耕土は西へ行くほど厚く堆積している。調査区の北側で丘陵の南斜面のH列、I列グリッドではV層が耕土化したV'層が表土となっている。

II層は流れ込み土であり、調査区の南側でI層の下部にあって比較的新しい時期の層位で、調査区南の土手を整地した後の土手面から流れ込んだものであろう。

III、III'層は腐植土で、同一の層位ととらえてもよく、調査区南東から同心円状に広がっていて、斜面下方の西へ行くほど厚く堆積しており下方の土はかなり締まっている。調査区東側のB6グリッドでは20cm程の堆積だが、西側のD2グリッドでは50cm程の厚さとなっている。IV層はV'の上層に当る暗灰褐色土で、砂粒を含み水分を多く含み締まりはない土質で、10cm前後の厚さで堆積している。

V層は丘陵を覆っている新期テフラ上部の黄褐色土であり、擾乱も受けず石も少ない。丘陵の南斜面に位置するH列、I列グリッドにあらわれ、調査区東北では平坦な地盤であるのに対し、それより南西では凹凸が激しい。

V'層は黄褐色土であるが黒色土による擾乱がかなりあり、黄褐色土自体も混土が見られ、

二次堆積土と思われる。この層の上部には1m以下の石が数多くあり、石はV'層に埋まつた状態や浮いた状態、攪乱の中に落ち込んだ状態で出ている。石は砂岩、花崗岩が多かった。

砂を含むIV層がV'層の上にあることから、この石も流れ込みによるものと思われる。

なおG3グリッドの西に層位を観察するためのトレンチを2m程掘り、途中から湧水があったため詳細な観察は断念したが、地表より60cm下に礫を含む黄褐色テフラ層が20~30cmあり、その下は礫を含まない黄褐色テフラ層となっていた。さらにこのテフラ層の下部に砂礫層があり、この層から湧水があった。「上井」の工事の折に出た粘土層が不透水層となっていることが推測できる。

以上のことから、第I調査区では現状より深い谷であった地形が、上部からや左右の丘陵からの土石の流入・堆積によって現在のような緩やかな谷地形となったものと思われる。

次に第II調査区の層位では、まずI層は調査前の牧草地の耕土である。II層とIV層は漸移層である。III層は黒褐色の腐植土で、調査区北側ではこの層は見られず流れてしまったものと思われる。III'層はIII層とV層との間にあり両層の土が混ざっている層である。V層は黄褐色のテフラで、非常に脆い2~3cm程の砂岩を多く含んでいる。調査区南寄りではIII層の落ち込みが頗るに見られ、木の根による攪乱が激しい。

オ2グリッドでは掘り下げるに南東から北西へ向かう滝状の落ち込みとなり、底の土層にわずかに砂が混じっていることを確認した。他のグリッドでは現れずオ2グリッドのみであったが、緩やかな谷地形の底付近にあることや、下へ下るにしたがって幅が広くなることから自然流水路と思われる。

### 第3節 出土遺物

(第4、5、10、11、12、13図、グリッド一覧表、写真14~17)

グリッド内からの出土遺物は、第I調査区では土器片が77点、陶器片が2点、石器類16点、炭化物2点であった。第II調査区では土器片2点、石器2点の出土のみであった。なお土器片の接合例は無かった。

遺物の分布は第4、5図のとおりで、第I調査区では東南部でもっとも密度が濃く同心円状に北西へ広がりを持ち、多くがV層より上層で出土している。この同心円状の分布は土層のIII、III'層の広がりと一致している。また第II調査区での4点の出土遺物は、いずれもIII'層からの出土である。

第10図に示した土器片は、5を除きいずれも縄文時代中期後葉期のものである。

1は刻目を持つ隆帯下の脇部は溝巻文を配し、曲線をえがく沈線が地文となる。2の沈線による綾杉文も脇部の地文である。3は中期後葉初頭の梨久保B式に見ることができる細縦帯貼付による文様をもつ土器である。

4は偏平な隆帯を貼り付けた後その下部に刻み目を付けており、胎土はきめが細かい。5は沈線の区画内にRLの縄文を施したもので縄文時代後期の土器である。6は半裁管施文具による綾の平行沈線を地文とする土器の脇部破片で中央は垂下帯である。口縁部が無文で円筒形に近い形で立ち上がる脇部をもつ曾利I式の系統に近い土器である。7は口縁部破片で、口縁部区画に太い隆帯による連続入り組み文を施す深鉢で、区画内は綾の平行沈線文を充填している。8はRLの縄文を施す土器であるが、内面は凹凸が顯著で、胎土は石英、長石、雲母などを多く含む。9は細条線を脇部地文とする土器で、胎土は石英、長石、雲母などを多量に含む。10は口縁部に付くX字状把手の上部破片で、断面が三角形の粘土の両側に粘土紐を溝巻状に貼り付け、紐の間を棒状施文具でなぞって作られており、その他の部分は指頭による調整を行っている。胎土は0.1mm程の長石等を含む。11も把手であり、両側に溝巻文

を配している。上部の溝巻は口縁部を巡っている沈線が両側から落むものである。胎土は暗赤褐色で0.1mm以下の砂粒が多く含みかなり脆い。

第11図の石器1～7は硬砂岩製の打製石斧で、5、6、7は大型の石斧である。この中で2、4、6、7は岩質が緻密で、6は多數の亀裂が走っている。

第12図の1の岩質は雲母を多量に含む比較的柔らかい砂岩で、2は多孔の硬砂岩である。

3は三箇所に分かれて出土しており、それぞれ約10cmの距離を置いて散らばっていて、接合可能であった。粘板岩で上部に打痕らしき痕が見られるが使用痕はない。

第13図の1～3は硬砂岩の剥片石器である。4と5は礫から剥片を剥いた残片と思われ、4は緑色岩で5は硬砂岩である。5は光沢のある平滑面をもち搔き器的な使用も考えうる。6は硬砂岩製の磨石で片面に平滑な面がある。7は粘土板岩の河原石で、使用痕は無く鉛石として使用されたものと思われる。8はH4グリッドから出土した弥生時代の磨製石器。粘板岩製で、凹基であるが脚の1方が欠損している。法量は長さ64mm、幅27mm、基部長10mm、厚さ4mm、重さ約7gである。本調査で弥生時代の遺物はこの磨製石器のみであるが、近辺の弥生時代の遺跡は調査区の西に丸山遺跡がある。

なお陶器2点は、D4グリッド出土の破片が江戸時代後期の灰釉碗で、F4グリッド出土のものが室町時代の美濃鉄釉壺の破片である。両者とも比較的上層で出土している。

炭化物はD2グリッドから杉の実を、H4グリッドの炭化物層から木の炭化物を採集したがいずれも最近のものであると思われる。

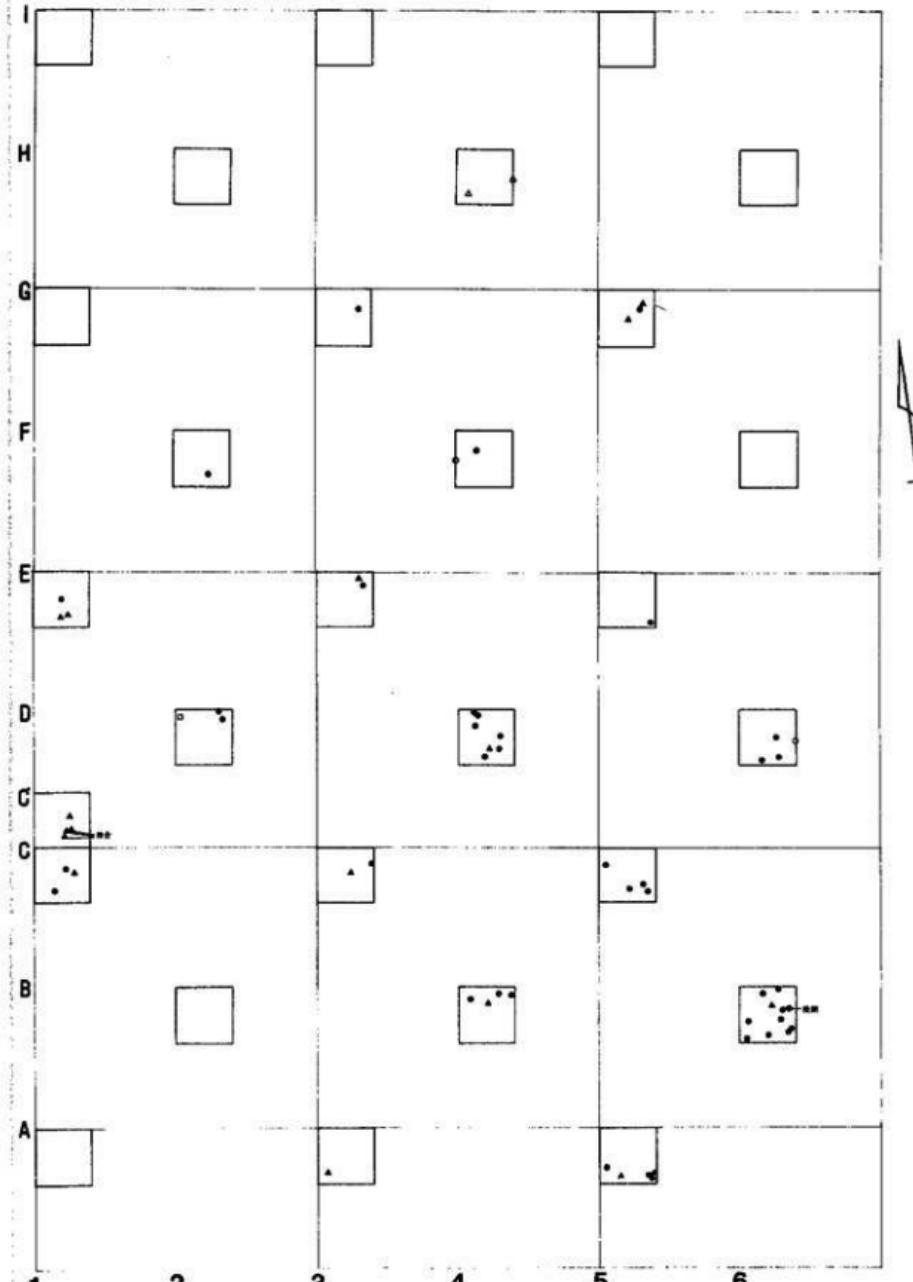
## 第IV章 総 括

本調査において遺物の分布状態は、第I調査区では谷地形の上方より下方への広がりを持ち、腐蝕土の堆積状態と一致する。またこの谷の上方には山田遺跡の発掘調査跡があり、縄文時代中期後葉の住居址が発掘されていて、調査区出土の遺物も同時期の土器がほとんどである。よって第I調査区の出土遺物は山田遺跡から流入してきたもの考えることができる。

山田遺跡の住居址は7軒が発掘されているのみで、集落の広がりは確認されていないが、両調査区の上方の比較的平坦な斜面に広がりを持つことが予想できる。そして第II調査区では文様の無い縄文土器片が2点と打製石斧が2点のみの出土であったが遺構ではなく、これらの遺物も山田遺跡から流入したものと思われる。

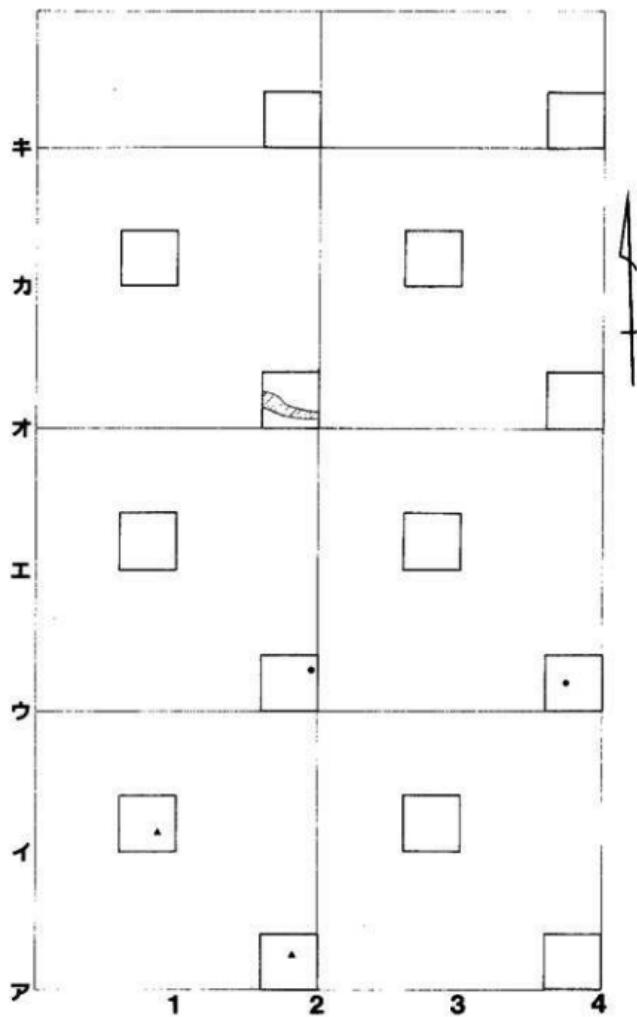
また第I調査区において弥生時代の磨製石器が1点出土しているが、調査区の西に丸山遺跡が広がっており、関係が注目される。

以上、簡単であるがまとめと概要報告とする。



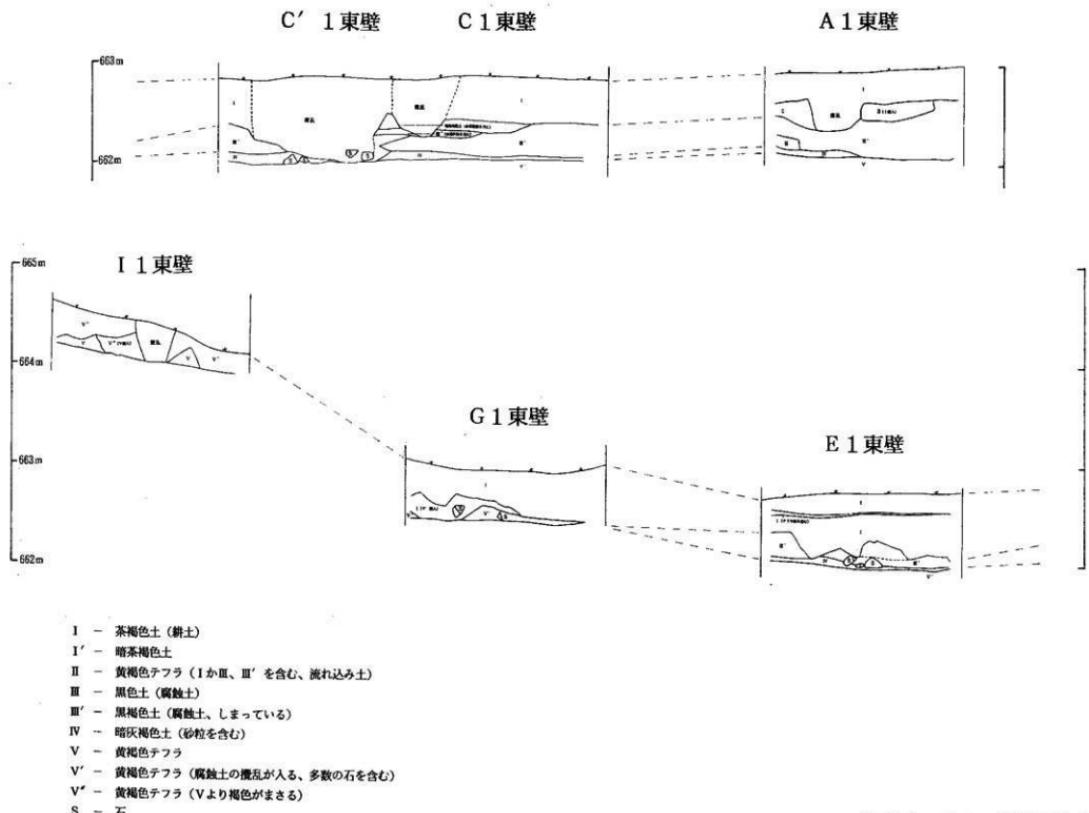
第4図 第1調査区グリッド設定図および遺物の分布状況(S=1:200)

●土器 ▲石器 ○陶器 △磨製石器 □炭化物

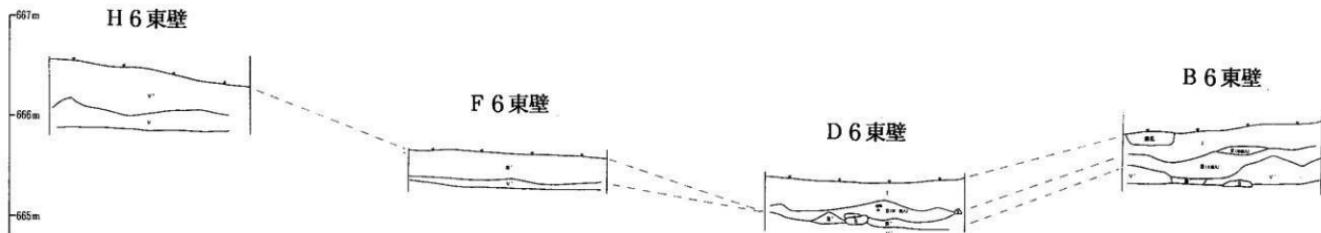
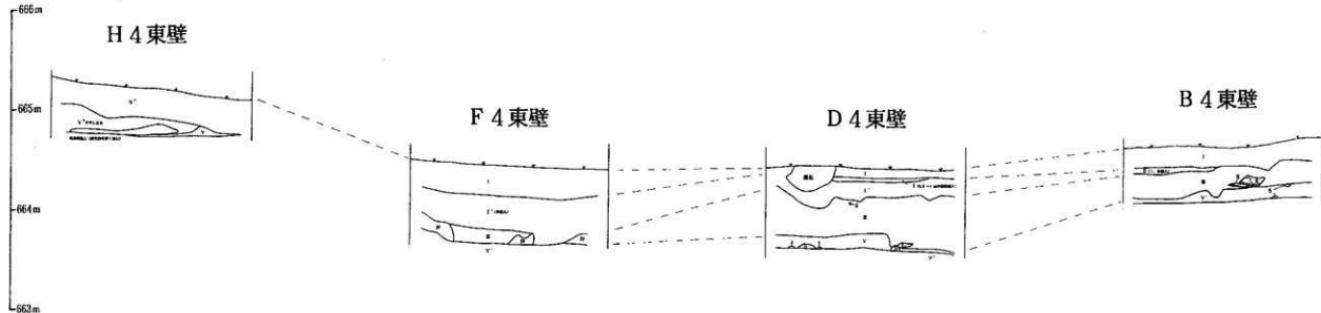


第5図 第II調査区グリッド設定図および遺物の分布状況(S=1:200)

●土器      ▲石器

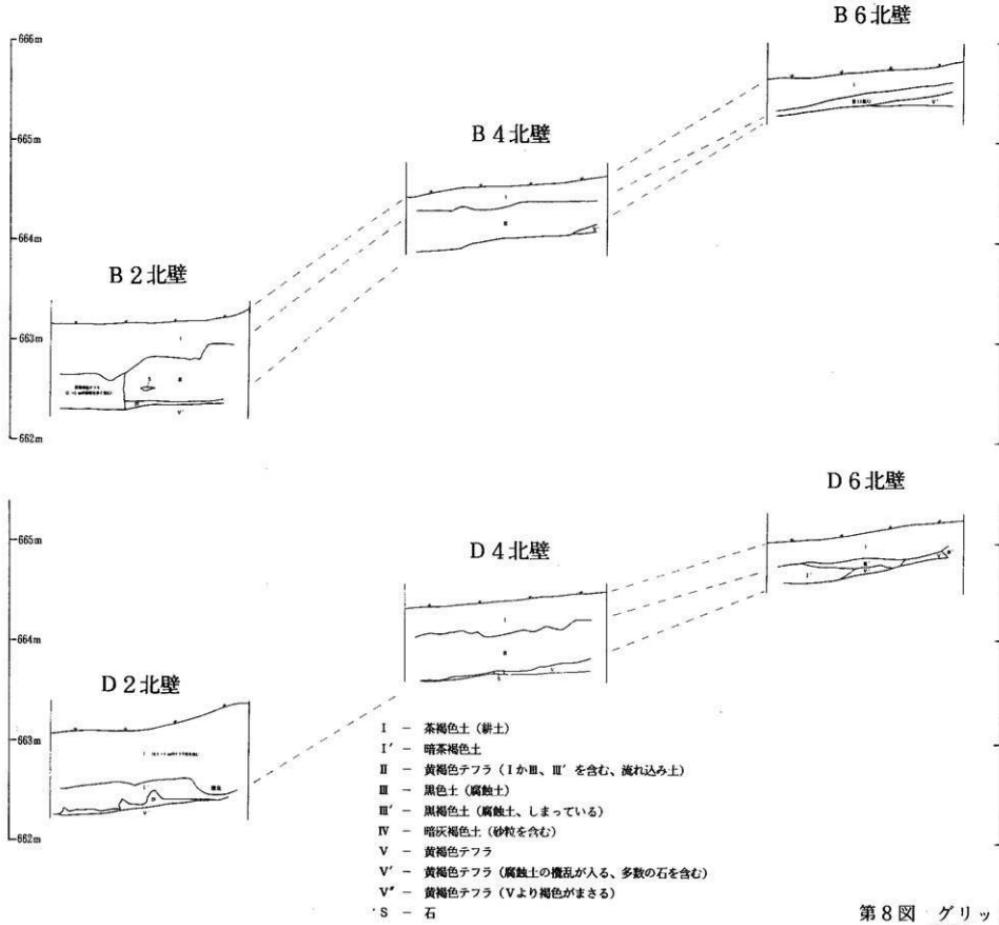


第6図 グリッド断面土層図1  
(グリッド内 S=1:40)

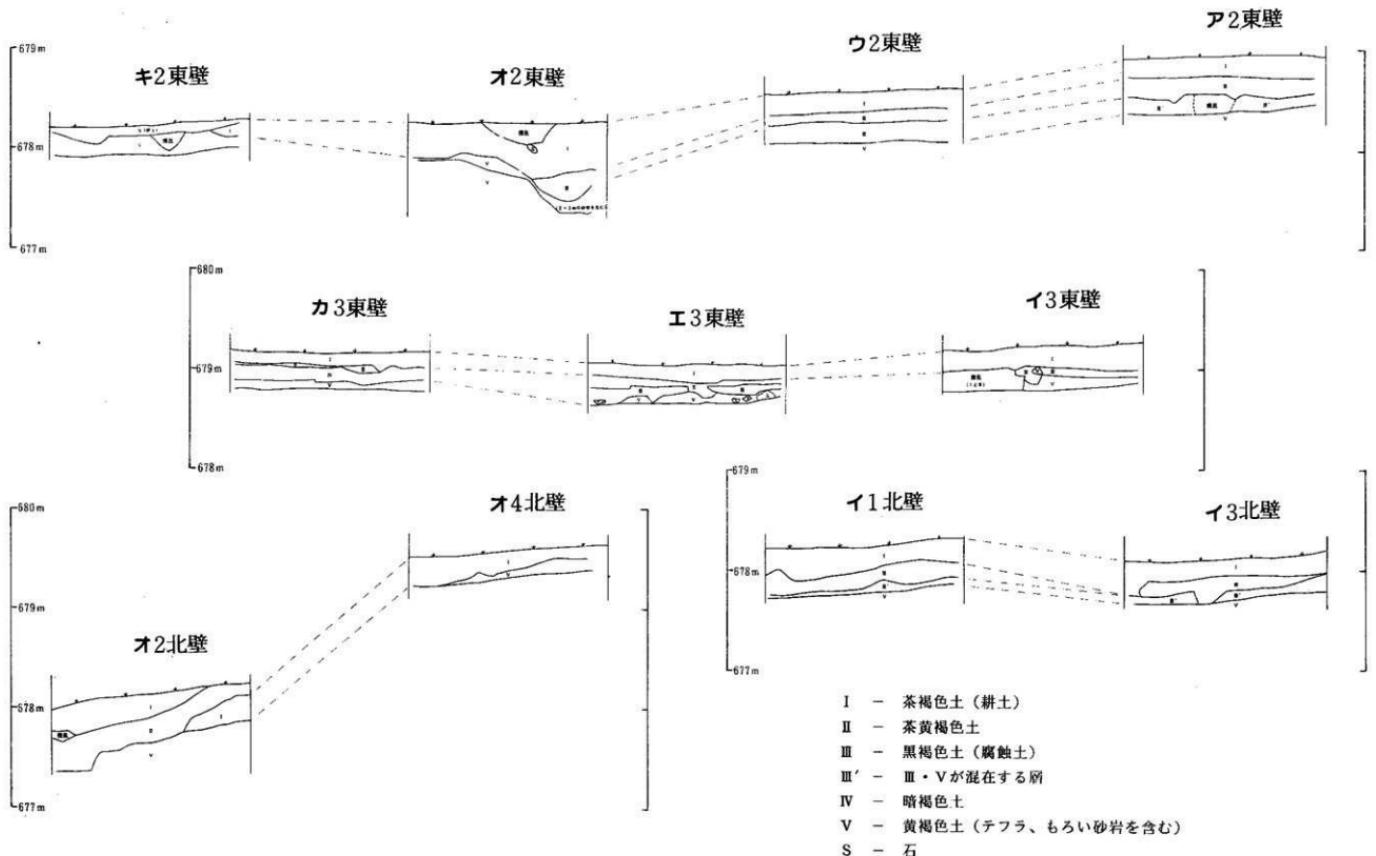


- I - 茶褐色土(耕土)
- I' - 喰茶褐色土
- II - 黄褐色テフラ(IかIII、IV'を含む、流れ込み土)
- III - 黒色土(腐殖土)
- III' - 黑褐色土(腐殖土、しまっている)
- IV - 噴灰褐色土(砂粒を含む)
- V - 黄褐色テフラ
- V' - 黄褐色テフラ(腐殖土の擾乱が入る、多數の石を含む)
- V'' - 黄褐色テフラ(Vより褐色がまさる)
- S - 石

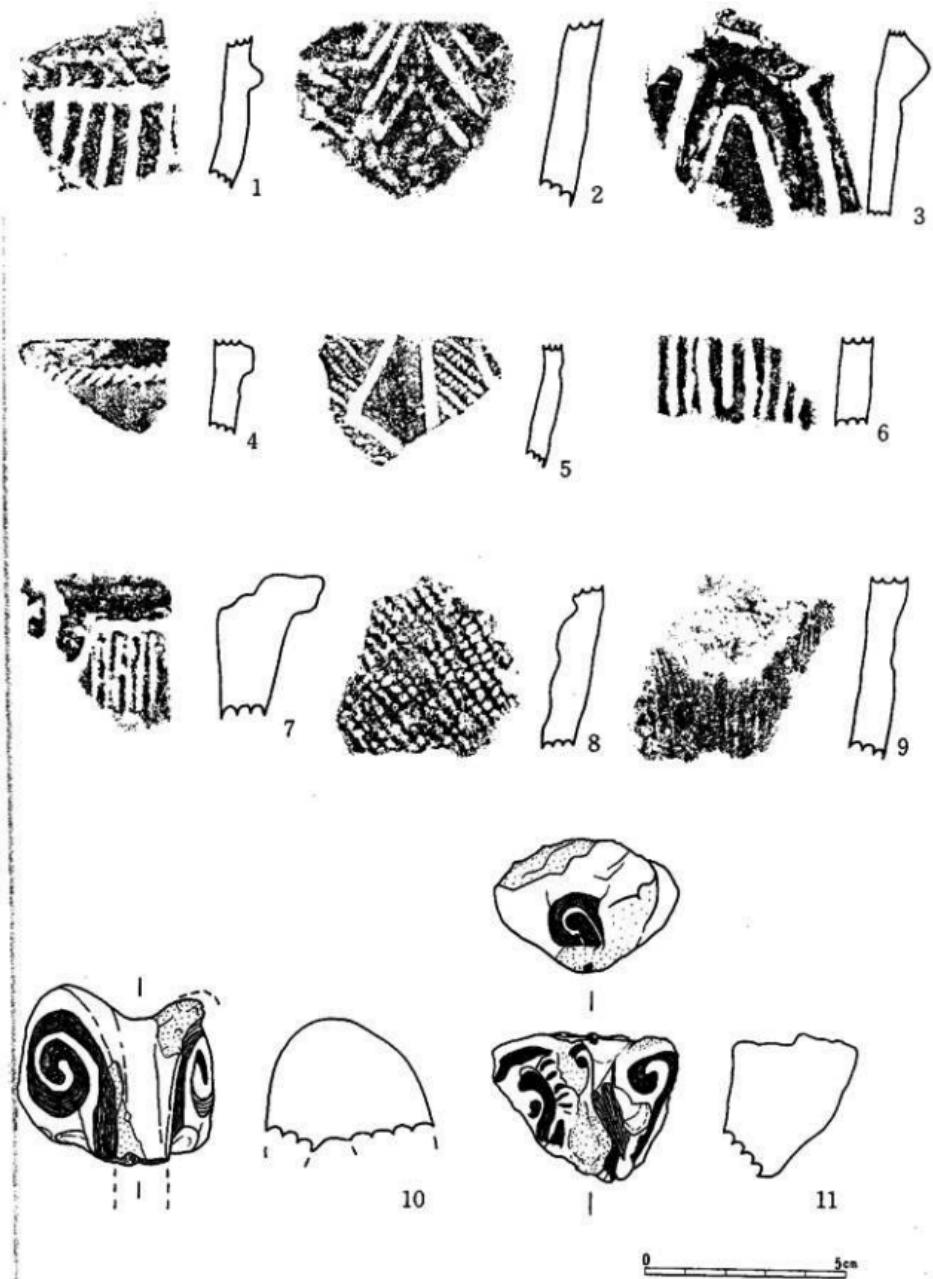
第7図 グリッド断面土層図2  
(グリッド内 S=1:40)



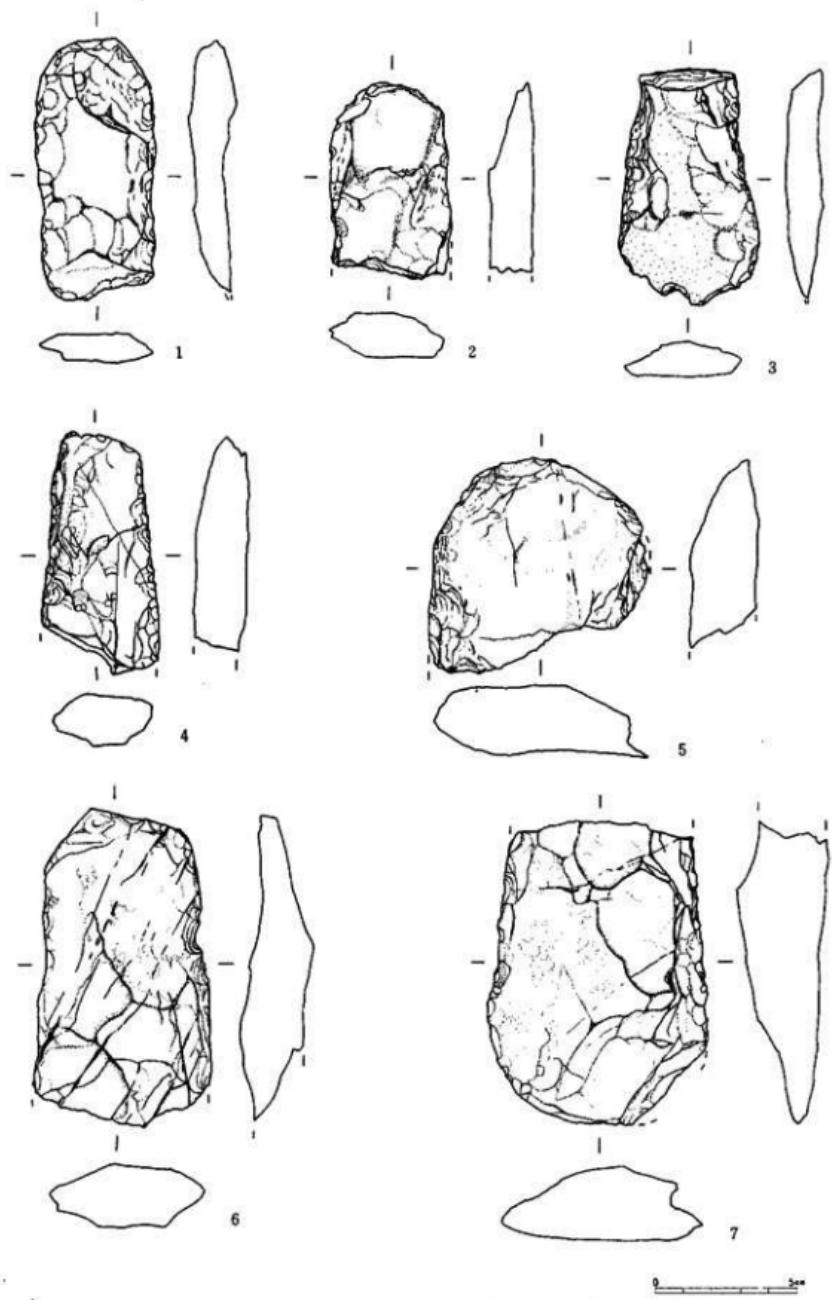
第8図 グリッド断面土層図3  
(グリッド内 S=1:40)



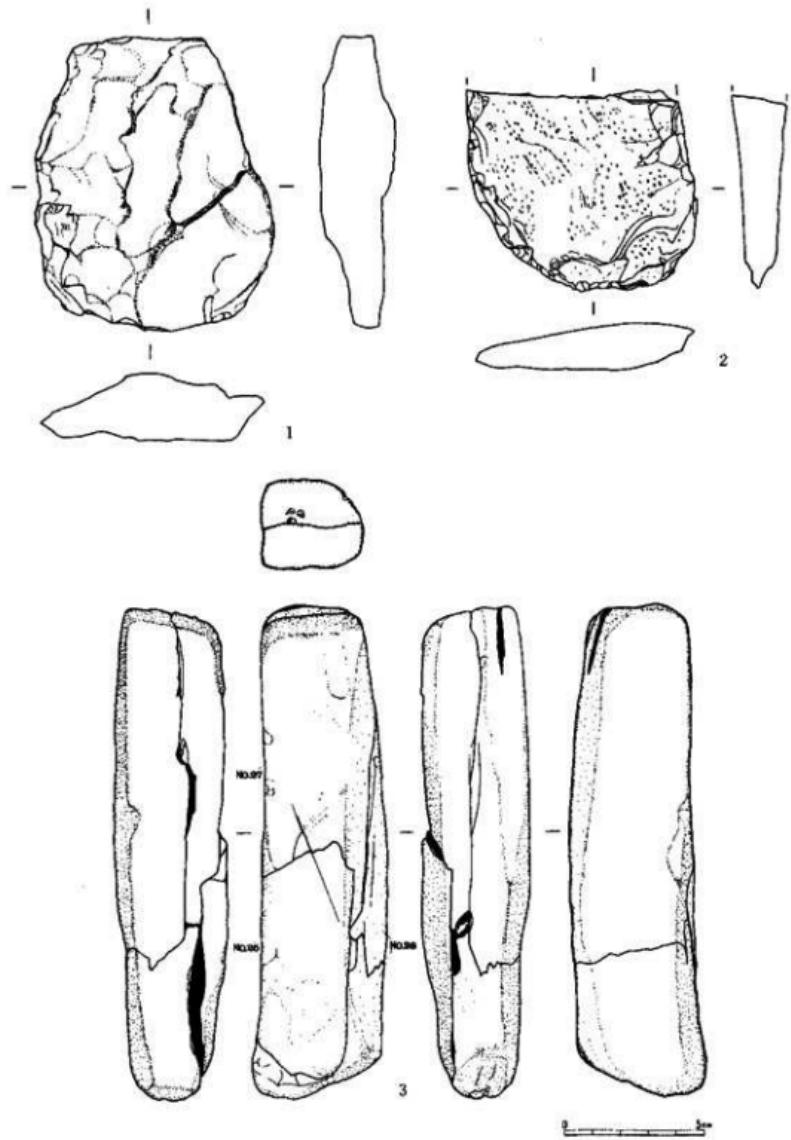
第9図 グリッド断面土層図4  
(グリッド内 S=1:40)



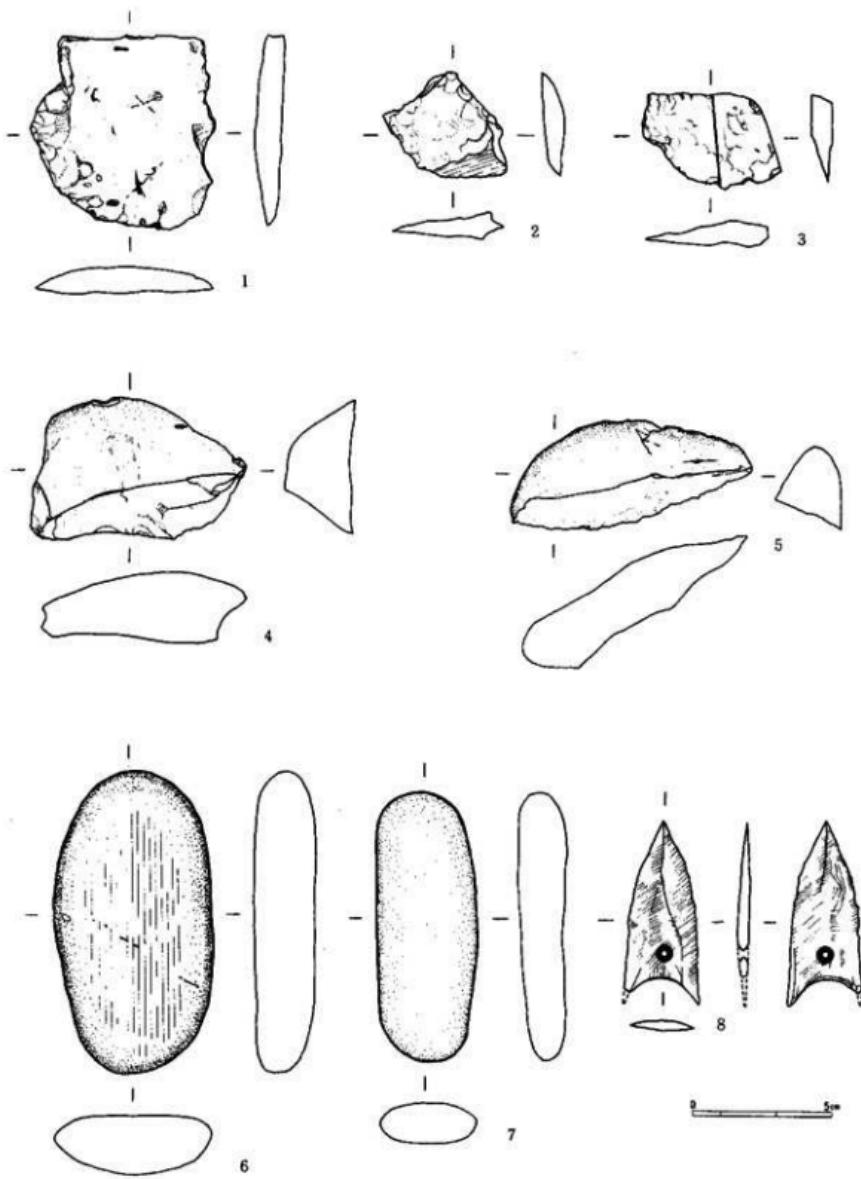
第10図 グリッド出土土器実測図



第11図 グリッド出土石器実測図1 (S=1/2)



第12図 グリッド出土石器実測図 2 (S=1/2)



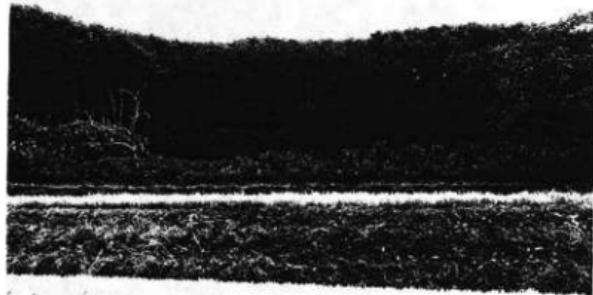
第13図 グリッド出土石器実測図 3 (S=1/2)

分布調査グリッド一覧表

グリッド名	基盤	断面実測	出土遺物、その他			
			土器	陶器	炭化物	石器
第 I 調査区	A 1	V' 層	東壁			1 硬砂石斧
	A 3	"				2 硬砂石斧、硬砂石器
	A 5	"		4		
	B 2	"	北壁			
	B 4	"	東・北壁	4		1 硬砂石斧
	B 6	"	"	12		1 硬砂剥片
	C 1	"	東壁	2		1 鏈石
	C' 1	"	"			2 硬砂磨石、接合資料
	C 3	"		5		1 砂岩石斧
	C 5	"		14		
	D 2	"	北壁	2		
	D 4	"	東・北壁	10	1	1 硬砂剥片
	D 6	"	"	10		
	E 1	"	東壁	2		2 石斧、綠色岩石器
	E 3	"		3		1 硬砂石斧
	E 5	"		4		
	F 2	"		2		
	F 4	"	東壁	1	1	
	F 6	V層	"			
	G 1	V' 層	"			
	G 3	V層		1		
	G 5	"		1		2 硬砂石斧、硬砂剥片
	H 2	"				
	H 4	"	東壁		1	1 磨製石鐵
	H 6	"	"			
	I 1	"	"			
	I 3	"				
	I 5	"				
第 II 調査区	ア 2	V層	東壁			1 硬砂石斧
	ア 4	"				
	イ 1	"	北壁			
	イ 3	"	東・北壁		1	1 硬砂石斧
	ウ 2	"	東壁	1		
	ウ 4	"				
	工 1	"				
	工 3	"	東壁			
	オ 2	"	東・北壁			
	オ 4	"	北壁			
	カ 1	"				
	カ 3	"	東壁			
	キ 2	"	"			
	キ 4	"				
						(溝)



1. 分布調査区遠景 (天竜川対岸より)



2. 第Ⅰ調査区 西より



3. 第Ⅱ調査区 西より

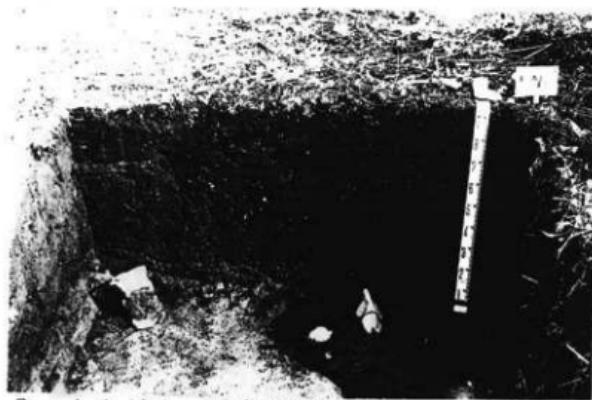
写真 1



1. 第 I 調査区調査前状況

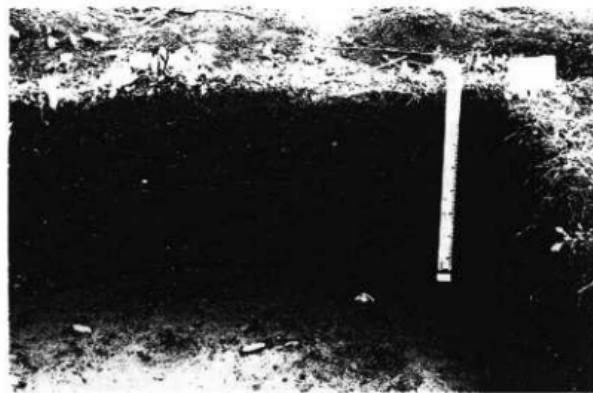


2. 第 II 調査区調査前状況

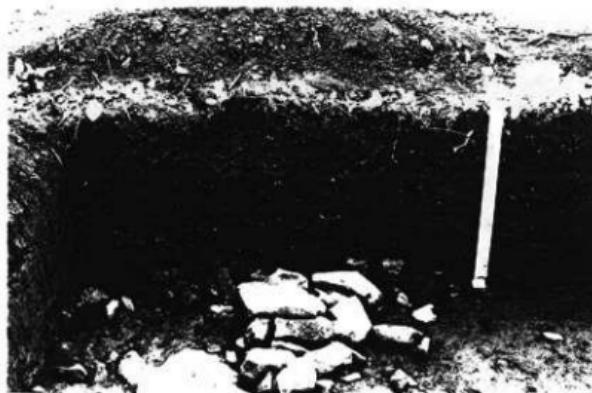


3. A 1 グリッド東壁断面

写真 2



1. C 1 グリッド東壁断面

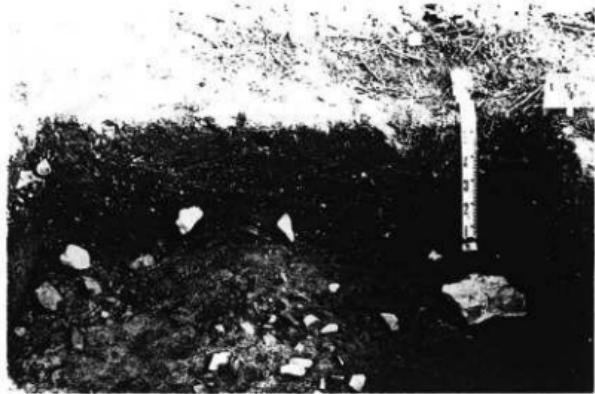


2. C' 1 グリッド東壁断面

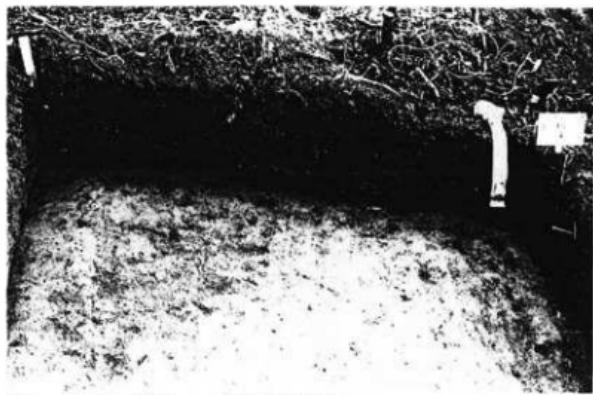


3. E 1 グリッド東壁断面

写真 3



1. G 1 グリッド東壁断面



2. I 1 グリッド東壁断面

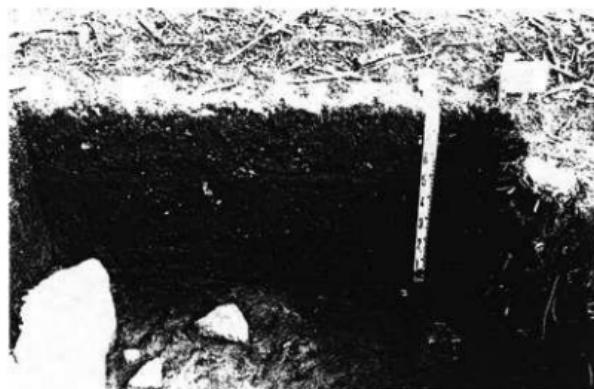


3. B 4 グリッド東壁断面

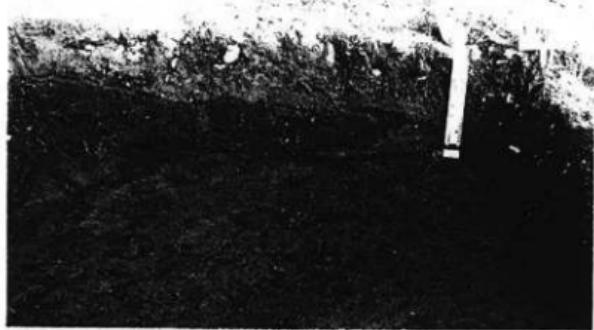
写真 4



1. D 4 グリッド東壁断面



2. F 4 グリッド東壁断面



3. H 4 グリッド東壁断面

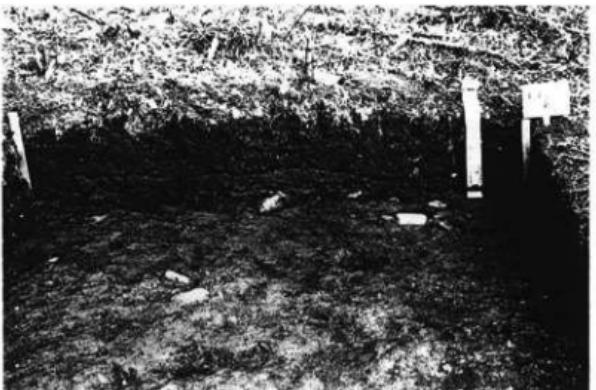
写真 5



1. B 6 グリッド東壁断面



2. D 6 グリッド東壁断面



3. F 6 グリッド東壁断面

写真 6



1. H 6 グリッド東壁断面



2. B 2 グリッド北壁断面

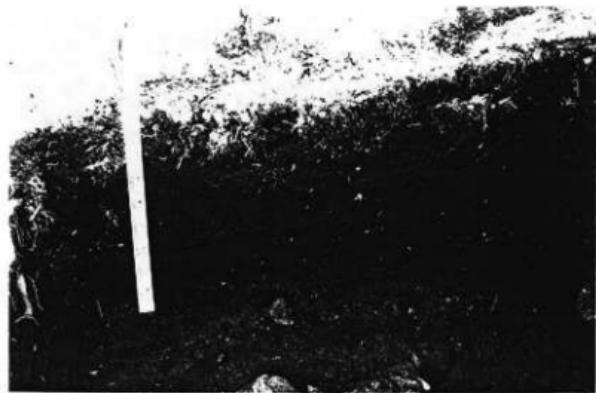


3. B 4 グリッド北壁断面

写真 7



1. B 6 グリッド北壁断面



2. D 2 グリッド北壁断面

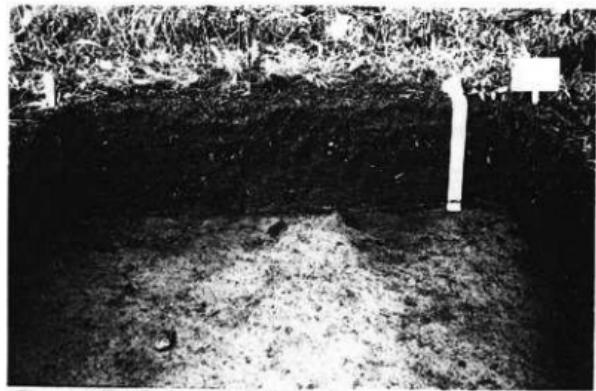


3. D 4 グリッド北壁断面

写真 8



1. D 6 グリッド北壁断面



2. ア 2 グリッド東壁断面



3. ウ 2 グリッド東壁断面

写真 9



1. オ2グリッド東壁断面

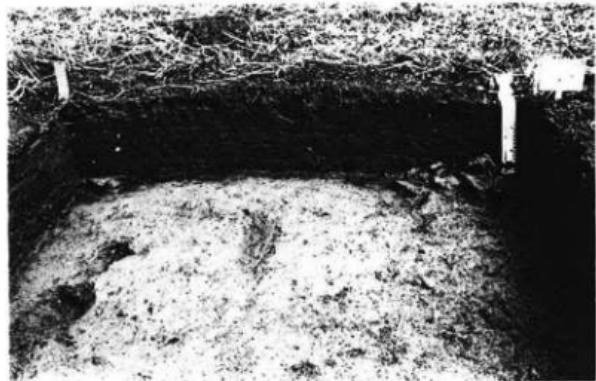


2. キ2グリッド東壁断面



3. イ3グリッド東壁断面

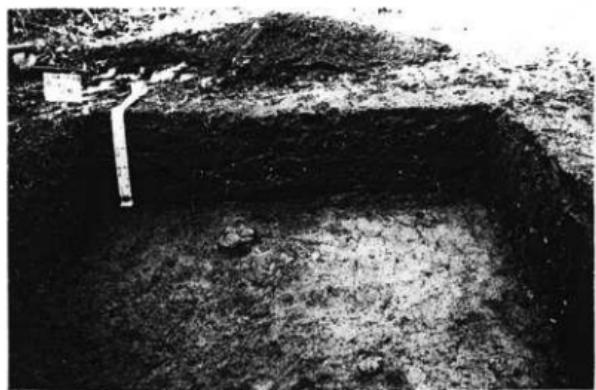
写真10



1. エ3グリッド東壁断面



2. カ3グリッド東壁断面



3. イ1グリッド北壁断面

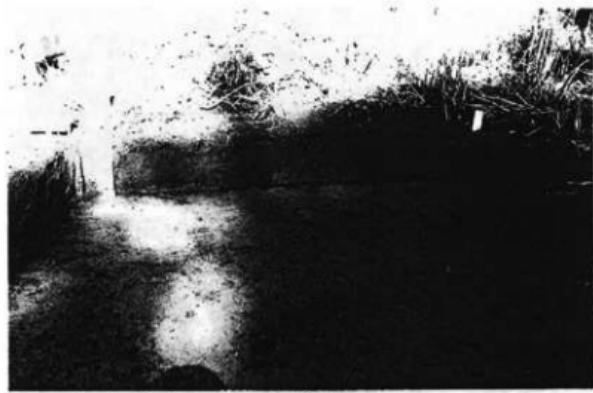
写真11



1. イ3グリッド北壁断面



2. オ2グリッド北壁断面

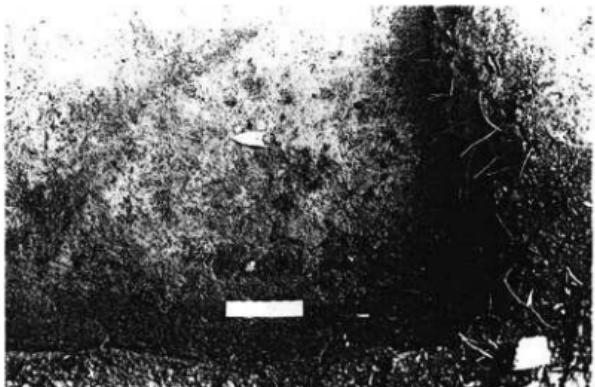


3. オ4グリッド北壁断面

写真12



1. オ2グリッド流路検出状況

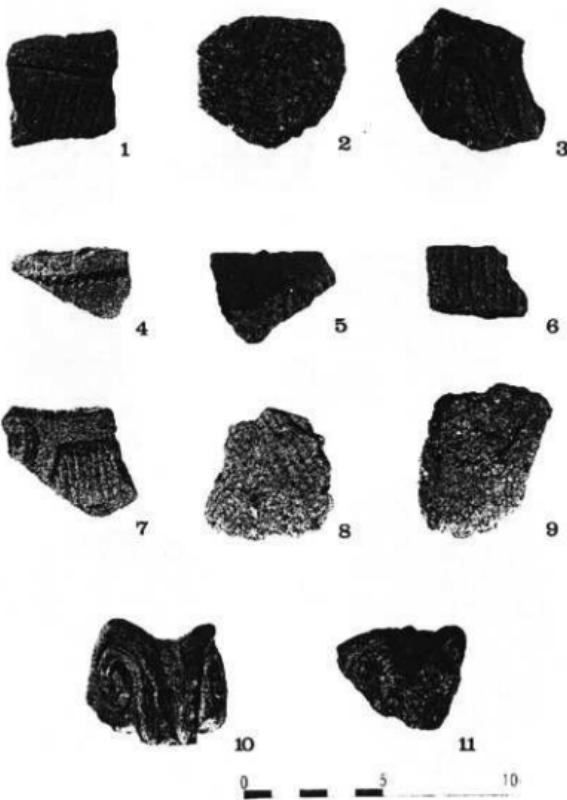


2. H4グリッド磨製石鎌出土状況

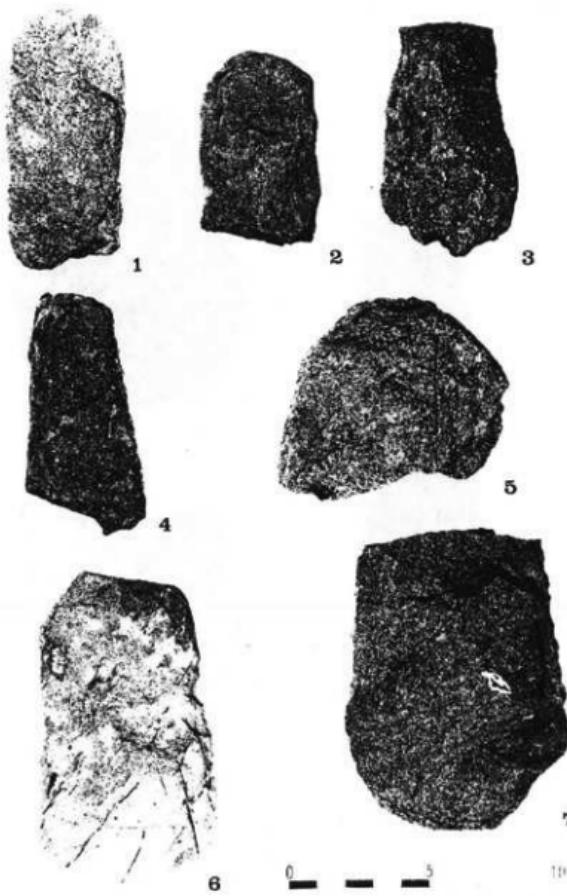


3. 第II調査区調査風景

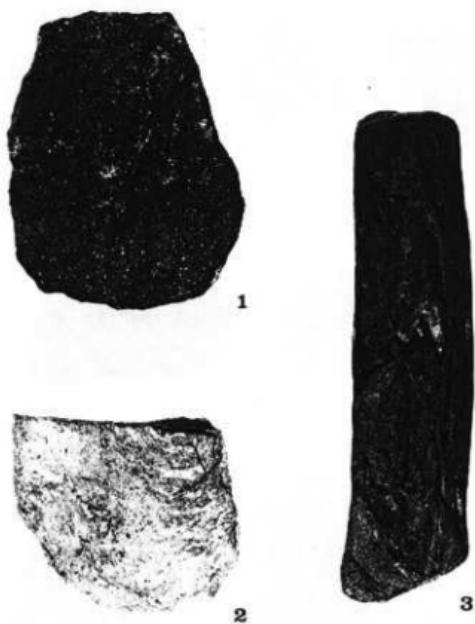
写真13



グリッド出土土器

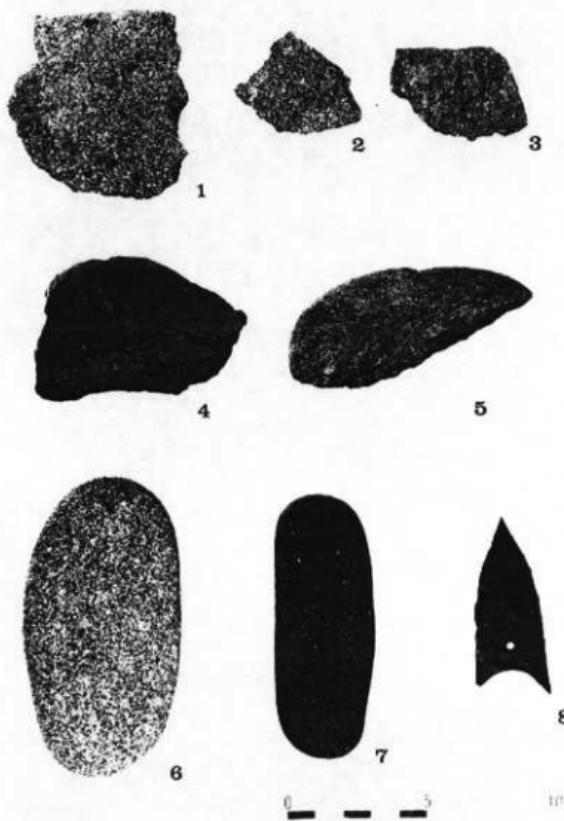


グリッド出土石器 1



— — —

グリッド出土石器 2



グリッド出土石器 3